

国立国際美術館館長

たてはた 建畠
あきら 哲さん(57)

美術界の目利きは、腕利きにもなるべく、美術館の現場に帰ってきた。

「ここ大阪をベルリンみたいな環境にできればいいですね」と、まずは、構想力の大きさを披露してみせた。

4月から館長になった国立国際美術館は、昨年に大阪・中之島に移転して再び活動を始めたところ。大都市の中心に美術館・博物館を集中立地させるベルリンの博物館島のような可能性も秘めている、というわけだ。



大阪市北区で

勤務している。

「この美術館に戻ってくるのは、14年ぶりです。ずっと東京の美術大学に勤めていたので、浦島太郎みたい」

「おおよそ美術館、博物館というものは今、全国的に風当たりが強い。元の職場に、館長として復帰したという感慨もあるが、なにより、独立行政法人の運営になるうとは夢想もしていなかった。

「日本の美術館の不幸は、スタンダード（規範）となるモデルを構築する前に、財政

難に直面してしまい、冬の時代を迎えてしまったこと。それ、観客数を増やせと圧力をかけられ、ファッション、アニメの展覧会から催し物会場まで、何でもありの状況になっってしまった」

「だからこそ、この美術館ではオーソドックスな展示を軸線に据えたいという。もちろん、頑固な守旧派宣言ではない。館長着任マニフェストは「美術館は死んだ。美術館せよ」。真の意味で様々なアートの交流の場を目指す。

(編集委員・森本俊司)

アートの交流へ「美術館せよ」

京都市出身。美術雑誌編集者、学芸員、美術評論家、美術大学教官と、アートの分野を縦横無尽に駆け抜け、詩人としても活躍する。国立国際

美術館は大阪・千里万博公園にあったところに学芸員として